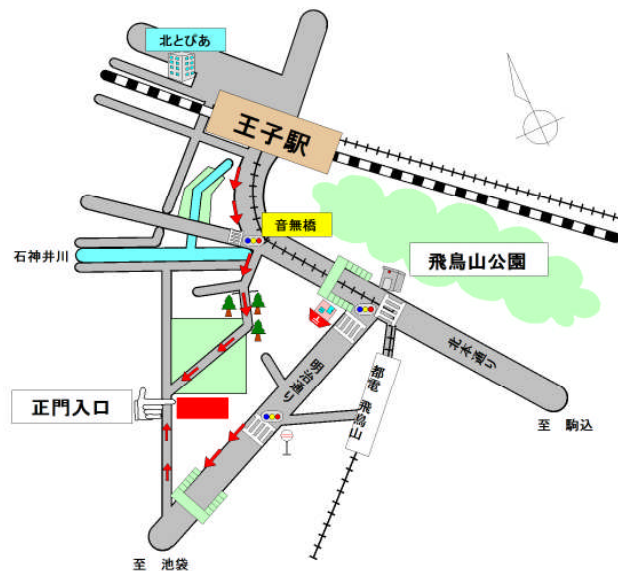


つまき より なか
妻木 頼 黄



安政 6 (1859) 年江戸生まれ
文久 2 (1862) 年 3 歳で禄高千石の旗本家の家督を相続
明治 9 (1876) 年渡米、放浪生活後、明治 10 年帰国
明治 11 年工部大学校(後の東京大学工学部) 入学
明治 15 年米国コーネル大学 3 年に編入学
明治 17 年同校建築学科を優秀な成績で卒業
明治 18 年帰国。同年東京府に准判任官として採用
明治 19 年 5 月内閣直属の臨時建築局へ
ドイツへ留学、シャルロッテンベルグ工科大学で近代建築学を学ぶ
帰国後、大審院・東京控訴院・東京地方裁判所の建築主任に任命
その後、大蔵省技師(明治 30 年就任)などの役職を兼任
全国の大蔵省関係設備の設計、建設を統括
明治 38 年大蔵省臨時建設部長に就任
官庁工事の他、丸三麦酒(カブトビール)半田工場(現半田赤レンガ建物)、横浜正金銀行本店(現神奈川県立歴史博物館)、横浜新港埠頭倉庫(現横浜赤レンガ倉庫)、日本橋(意匠装飾のみ)などを設計
大正 2 年 5 月大蔵省を依願退職
大正 5 (1916) 年逝去(57 歳)



交通 JR・東京メトロ「王子駅」から 徒歩 10 分
都電・都営バス「飛鳥山」から 徒歩 7 分



赤レンガ酒造工場

独立行政法人酒類総合研究所 東京事務所

MEMO



赤レンガ酒造工場



日本橋



神奈川県立歴史博物館



半田赤レンガ建物



横浜赤レンガ倉庫

〒114-0023 東京都北区滝野川 2-6-30

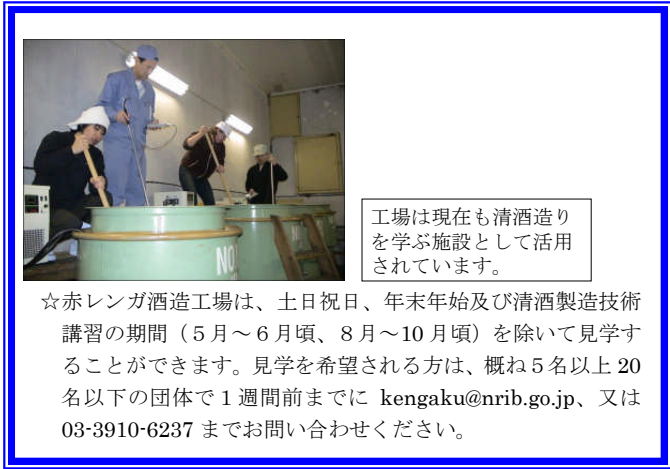
TEL 03-3910-6237 (代表)

赤レンガ酒造工場

赤レンガ酒造工場は、大蔵省（現在の財務省）醸造試験所が創立される前年の明治 36（1903）年に建築されました。

設計は、明治を代表する建築家である妻木頼黄（つまきよりなか）^{つまきよりなか}（当時は大蔵省総務局営繕課長）です。建築にあたり妻木は、当時冬季に限られていた日本酒の醸造を四季を通して行えるようにするため、ドイツのビール工場を参考にして設計したと伝えられています。冷却機など醸造用諸機械もドイツから輸入した最新鋭の酒造工場でした。

妻木が設計した建物で現存するものはとても少なく、貴重な存在となっています。



アーチ

通路や部屋の入口に見られるアーチは、目地を一定間隔にしてれんがを積んであり、Bonded arch と呼ばれています。

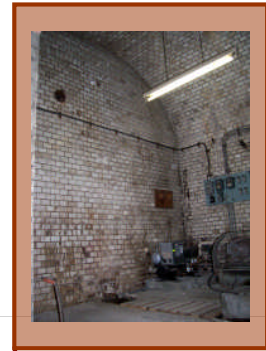
これらは見た目も美しく強度も強いですが、れんがを台形状に焼き上げるなど、工事はたいへん手間のかかるものです。さらに赤レンガ酒造工場に使用されている台形れんがは全部で38種のサイズがあり、非常に細かな仕事が行われていたことが分かります。



化粧れんが

赤レンガ酒造工場の壁体れんがはイギリス積みで積んでありますが、外壁の一番外側1枚分にだけ化粧れんががドイツ積みで積んであります。日本では明治28年頃からドイツ積みが始まり、建設された当時はれんが職人も監督指導する妻木頼黄も慣れておらず、苦労は並大抵のものではなかったと思われます。

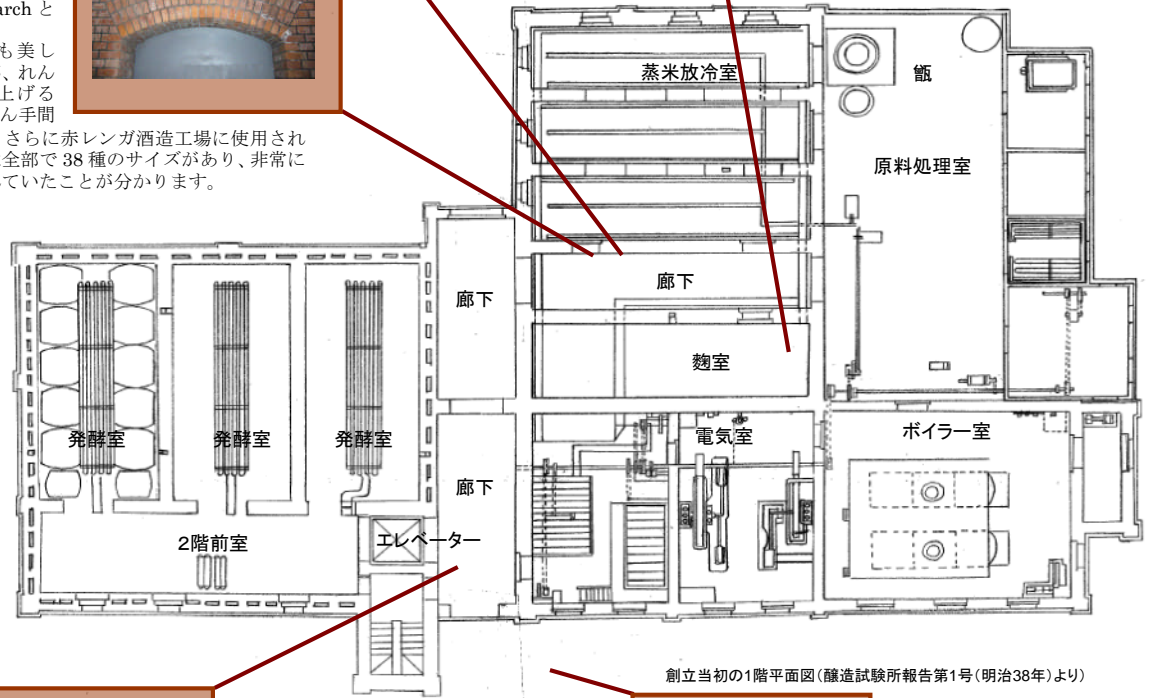
また、イギリス積みの内部には所々に断熱用の空間が設けられています。



旧麹室

壁から天井まで白いタイルが貼ってあるように見えますが、これは表面のみ白色で施釉されたれんがです。水分の調整が利かず、麹室としては不向きなため使用されなくなりました。

施釉白れんがは日本銀行の地下金庫にも使用されていますが、赤レンガ酒造工場はこれに次いで施釉白れんがを使用した現存する建物で2番目に古いと言われています。



耐火床

1階の天井は2階の床と一体化しています。これは一般に耐火床と呼ばれ、両側の壁の上に1形鋼の小梁を架け渡し、その間にれんががアーチで埋める床面構法です。

現代建築のように鉄筋が入っておらず、上からの荷重をアーチの形によってうまく伝達させている構造となっています。



釜台（きりだい）

元治元（1864）年、江戸幕府はこの地を王子村名主より買い上げ、大砲鑄造の用地として反射炉と釜台（砲身の穴あけ機）を置きました。

醸造試験所は、この用地の一部に当たり、現在は釜台の一部だけが残っています。

赤レンガ酒造工場についての説明は、工学博士である長谷川哲也先生が行った構造・耐震調査の報告書等から抜粋しています。